

特集 摂食障害：病態・診断・治療の最前線

摂食障害：病態・診断・治療の最前線

切池 信夫, 岡本 百合

摂食障害患者の脳の病態に関して、脳画像的研究により多くの知見が得られているもののその病態は未だ明らかでない。診断に関しても、診断の移行や併存症の問題は未解決であり、治療に関しても画期的な治療法が開発されたわけでもない。このような現況を踏まえて、このシンポジウムでは、我が国での摂食障害に関する研究の最前線を報告していただいた。

上原徹氏（群馬大学健康支援総合センター）は、近赤外線分光技術により脳皮質血液量変化を自然な状態で非侵襲的に測定する near infrared spectroscopy (NIRS) を用いて、摂食障害患者の脳の病態について報告した。やせ願望やダイエットへのとらわれと右前頭側頭葉障害、過食や摂食行動と前頭前野眼窩面障害との関連性が示された。しかし、摂食障害の亜型間では前頭葉の賦活反応性に大きな差がないことが示された。この方法では症状の重症度、病状の回復や増悪により脳血液量賦活反応性が変化する。さらに NIRS は簡便で非侵襲的、コストがかからないことから一人の患者を縦断的に追跡でき、さまざまな状態における患者の脳の病態に関して有力な情報を得られる可能性があることが強調された。これは摂食障害の脳の病態研究に新しい方法を試みたもので今後の発展が期待される。

岡本百合氏（広島大学保健管理センター）は、女性摂食障害患者に、情動に関する単語刺激や身体イメージに関する単語刺激、身体画像刺激（-

25%～+25%まで拡大縮小した自己画像刺激）を用いて、課題遂行中の脳の活動性を fMRI により測定して、その結果を健常女性の結果と比較した。その結果身体イメージに関する刺激に対して、摂食障害患者は扁桃体や前頭前野の反応性が増加しており、肥満恐怖と扁桃体、過食/排出と前頭前野が関連していることが示された。次いで摂食障害患者に対して、認知行動療法的介入に焦点をあてたグループ療法を週1回10セッション行い、その前後で自己評価尺度の変化を検討した。その結果治療後に摂食態度、ストレス対処行動、自尊心尺度の有意な改善が示された。今後、この治療前後において脳機能画像がどのように変化するかについて興味のあるところである。

和田良久氏（京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学）は、摂食障害患者61名を対象に、広汎性発達障害（PDD）と注意欠陥多動性障害（AD/HD）の併存について報告した。その結果 PDD 疑い4名（6.6%）、AD/HD 疑い21名（34.4%）と高率に認められ、これらの患者はやせ願望や肥満恐怖で説明できないこだわりが強く、奇異で、内部洞察の低さだけでなく、体型不満・不安傾向が高いことを示した。そして治療的には、背景の発達障害の存在の理解に加え、その特殊性に焦点を当てた療育的治療の必要性を指摘した。今後、発達障害を背景にした摂食障害患者の神経心理学的研究や画像研究の進展を期待したい。

第106回日本精神神経学会総会=会期：2010年5月20～22日、会場：広島国際会議場・アステールプラザ

総会基本テーマ：求められる精神医学の将来ビジョン：多様な領域の連携と統合

シンポジウム 摂食障害：病態・診断・治療の最前線 座長：切池 信夫（大阪市立大学大学院医学研究科神経精神医学）、岡本 百合（広島大学保健管理センター） コーディネーター：切池 信夫

井上幸紀氏（大阪市立大学大学院医学研究科神経精神医学）は、事業所を対象に食行動異常に関する質問紙によりアンケート調査した。事業所の健康管理担当者は神経性食思不振症、神経性過食症について比較的認知していたが、夜食症候群についてはあまり認知していなかった。就労者約2,000人のアンケート調査では食習慣により仕事に問題が生じていると感じている労働者が6.8%（男性7.6%、女性5.0%）で、神経性食思不振症、神経性過食症、夜食症候群が疑われる労働者は各々0.27%（男性0.21%、女性0.50%）、

0.21%（0.21%、0.22%）、12.9%（13.9%、10.2%）であった。さらに摂食障害で外来通院している労働者の職業性ストレス調査結果では物理的環境は良いが、身体的負担は高く、仕事のコントロールは低く、上司・同僚の社会的支援は少ないと感じ、抑うつ気分が強かった。以上の結果から、これらの点に配慮した就労支援の必要性を強調した。

今後、このシンポジウムを契機に、摂食障害の病態、診断、治療法の研究がより盛んになることを期待したい。